

受け継ぎたい、中村医師の思いを

鹿児島修学館中学校 三年 加々良 健太

僕たち日本人は、透き通った水を様々な場所ですべて使っている。例えば、洗面所や台所、トイレなどあげればきりが無い。ただ、世界的に考えると、「水」はそんなふうには日常的で無意識に扱われているものではないということとを僕は、今回初めて知った。

そのきっかけは、中村哲医師が二〇一九年十二月四日、アフガンで銃弾に倒れたというニュースだった。

それからしばらくたち、どんな方だったのか知らなかった僕は、ネットでその業績を調べてみた。彼は医師でありながら、遠くアフガニスタンの地で、十五カ年計画で井戸を掘ったり、ため池を作ったり十キロメートルを超える用水路を作り上げたということだった。「水があれば、多くの病気と帰還難民問題を解決できる。水がない状態のところには薬を持っていくよりも、端的に水を大量に送れ

ば、活動はもつと本質的なものになるはずだ」と考えた彼は、「百の診療所より一本の用水路を」という信念の下に、自ら重機を動かしてパキスタン・アフガニスタンの難民の人々のために尽くした、と書かれてあった。

その結果、アフガニスタンでは汚い水を飲むことでの感染症による死亡率は、激減したそうだ。また、大量の水を送れるようになったことで、水の所有権をめぐる争いも減り、広大な農地を広げることまでできるようになったということだった。中村医師の活動は、さらに現地の人々の健康状態や生活環境を改善することにつながったそうだ。

これらの事実を知り、最近新型ウイルスの予防のために、たくさん水を流しながら手を洗っていることに、疑問すら持たなかった自分を振り返る機会も、中村医師にもらうことができた。自分だけの力では、そのことに気付くことができなかつたと思う。

今の自分は、中村医師のように現地に行っ

て用水路ができないにしても、水がなくて困っている人たちのために何かできることはないだろうかと考えてみた。ネットで調べてみると、「水募金」という活動があることを知った。途上国に送られた基金は、手押しポンプや家庭用トイレを設置することに使われるそうだ。調べている途中、その記事の冒頭の「妹の命を奪った水」という言葉に眼が止まった。姉のナンシーちゃんと家族は、妹の命を奪った危険な水と分かっていたても、他に水を手に入れる方法がなかったので、飲み続けるしかなかったのだそうだ。

また、先生から借りた本には、ひどい干ばつのため地面を掘って、泥水をすくって飲む子供の写真があった。僕は、これらの事実を知り、「水」がいかに貴重なものであるかということを改めて強く思った。

僕たちは、水に恵まれているがゆえに、「世界ではきれいな水を飲めずに苦しんでいる人が大勢いる」という事実を知っていながら、

そのことを忘れがちである。その理由を中村医師は、「日本人は、目先の経済安定にしがみつく短絡さから、視野が狭くなっている。環境問題は、自然と人間の関わりを根底から問うものだ」と警鐘を鳴らしている。

僕は、今回中村医師の活動や水募金・世界の水の状況を調べることを通じて、水について真剣に考える時間をもらったと思っている。

僕たちは、水が無くて苦しんでいる人がいるという事実を忘れてはいけない。

今後、中村医師の思いを受け継いでいく人は、たくさん出てくるだろう。いや、出て来て欲しい。

そして、僕もその中の一人でありたいと思った。水を大切に思う一人として。

今日から、顔を洗うとき、歯を磨くとき、水道から流れる水に感謝したい。